

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Life World of Kampung Durian Tawar : Hierarchy and Household among the Orang Asli, Malaysia

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 信田, 敏宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004003

ドリアン・タワール村の生活世界

—マレーシア、オラン・アスリ社会における階層秩序と世帯状況—

信 田 敏 宏*

Life World of Kampung Durian Tawar:
Hierarchy and Household among the Orang Asli, Malaysia

Toshihiro Nobuta

マレーシアのマレー半島部には、マレー系、華人系、インド系という3つの主要民族集団が住んでいると言われている。しかし、マレー半島には、3つの主要民族集団とは別にさまざまな少数民族が住んでいる。その一つが本稿で対象とするオラン・アスリである。彼らの生活世界については、これまで多くの研究が蓄積されている。近年、開発やイスラーム化などの外部からの介入によって、彼らの従来の生活は大きく変貌し、かつてのオラン・アスリの世界は消滅しつつある。彼らは、「文化喪失」の状況に置かれていると言えよう。

本稿では、ドリアン・タワール村におけるフィールドワークに基づいたデータによって、オラン・アスリの生活世界の現在を明らかにすることを目的とする。用いるデータは、主として世帯調査に基づくものである。世帯収入のデータを補足するために、ゴム採液による収入、ドリアン収穫による収入の集計調査のデータを利用する。

本稿の前半部では、ドリアン・タワール村の歴史をたどり、村の人びとの階層化の過程を明らかにする。そして、世帯調査結果、ゴム採液による収入、ドリアン収穫による収入のデータを用いることによって、「上の人びと」と「下の人びと」という階層秩序の経済格差を実証する。

後半部では、「世帯の記録」を提示する。私は、調査期間を通して得られた個々の世帯に関するさまざまな情報を、「世帯の記録」として整理した。「世帯の記録」は情報が多岐にわたるものであり、本稿で一括して分析することは困難なものである。むしろ、本稿で強調しているのは、「世帯の記録」を作成することによって、私がさまざまな研究テーマを発見していく過程である。「世帯の記録」を分析することによって、生業の分化と開発の論理、複雑な親族関

*国立民族学博物館研究戦略センター

Key Words : life world, hierarchy, household survey, indigenous people, development

キーワード : 生活世界, 階層秩序, 世帯調査, 先住民, 開発

係という視点、異種混濁性などのテーマが浮かび上がる。この意味で、「世帯の記録」というのは、オラン・アスリの生活世界の現在を示したものであると言えよう。

It is said that there are three main ethnic groups in the Malay Peninsula of Malaysia: the Malays, the Chinese and the Indians. In addition to these ethnic groups, various ethnic minority peoples live in the Malay Peninsula. One of them is the Orang Asli. Many anthropologists have conducted research on the Orang Asli so far. They described the “traditional” life world of the Orang Asli in their ethnographies. However, the Orang Asli have experienced a drastic change in recent years because of the intervention from the outer world: that is, development and Islamization. It is said that the traditional life world of the Orang Asli has rapidly disappeared in the process of “de-culturalization.”

The purpose of this article is to elucidate the life world of the Orang Asli in the present situation, using the ethnographical data from my fieldwork (1996–1998). The data in this article were obtained mainly by household survey. The data concerning household income are supplemented by the data concerning earnings from rubber tapping and durian harvest.

In the first half part of this article, I will sketch the village history of Durian Tawar to explicate the process of social stratification among villagers: a differentiation between “upper people” and “lower people.” I will demonstrate income disparities between them, using data from household survey and data concerning earnings from rubber tapping and durian harvest.

The second half in this article presents detailed information on each household in numerical order as “Household Memorandum.” Having a difficulty in conducting a complete analysis of “Household Memorandum,” I shall explain a discovery process of research topics. By drawing up “Household Memorandum,” I discovered various research topics; for example, differentiation of occupation, logic of development, complicated kinship relationship, hybridity and so on. Thus, it can be said that “Household Memorandum” shows the present life world of the Orang Asli.

1 はじめに	4.2.2.2 ゴムとドリアン——「上の人びと」と「下の人びと」の比較
2 オラン・アスリ	
3 階層秩序の歴史的生成	5 前半部の総括
3.1 親族関係	6 世帯の記録
3.2 ドリアン・タワール村の歴史	6.1 マンク・ハシムの親族群
3.3 ドリアン・タワール村の階層秩序	6.2 バティン・ジャングットの親族群
4 「上の人びと」と「下の人びと」の経済格差	6.3 スラッのキョウダイの親族群
4.1 世帯調査	6.4 バダッの親族群
4.1.1 調査の方法	6.5 ムントゥリ・グムツの親族群
4.1.2 世帯調査結果	6.6 ジェクラー・ポヤンの子孫の親族群
4.2 経済状況——ゴムとドリアン	6.7 アリの子孫の親族群
4.2.1 集計調査	6.8 アキ・マインの親族群
4.2.2 ゴムとドリアン	7 結語
4.2.2.1 土地所有状況	

1 はじめに

東南アジア島嶼部に位置するマレーシアには、主にマレー系、華人系、インド人系の人びとが住んでいるとしばしば説明される。しかし、実際のところ、マレーシアは、このほかにもさまざまな民族を抱えている多民族国家である。ボルネオ島側のサバ州・サラワク州には、カダザン、ムレット、イバン、ブナンなどの土着の諸民族が住んでいる。マレー半島側には、本稿で対象とする先住民オラン・アスリが住んでいる。

マレー系が主導権を握るマレーシア連邦政府は、マレー系の人びとの利権を確保するために、プミプトラという概念を想定し、プミプトラのカテゴリーに入る人びとを優遇する政策を実施した。いわゆるプミプトラ政策である。この政策を実施するための大義名分は、イギリス植民地期に移住してきた華人系やインド系の人びとの政治経済的優位性に対して、人口の大半を占めるマレー系の人びとを保護することである。しかしながら、マレー系の人びとだけでは全体人口の過半数に達しないので、この大義名分は成立しなくなる。そこで、上記のサバ・サラワクの諸民族やオラン・アスリ

もブミプトラのカテゴリーに組み込み、「ブミプトラ」が全体人口の過半数を確保しているという状況を創り出したのである。

ボルネオ島側の多民族状況と比較すると、マレー半島部の民族状況は異なる。マレー系、華人系、インド系が人口の大半を占めるマレー半島部において、オラン・アスリは人口10万人弱の極少のマイノリティであり、政治経済的にも社会的にも周縁化された存在である。しかしながら、歴史的観点からすると、オラン・アスリは、マレー系の人びとよりも早い時期からマレー半島部に先住しているという特異な存在である。また、いわゆる学術的関心にとどまらず政治経済的な関心を持たれる存在であると同時に、しばしばマレー系主導の政府によって、政治的に利用される存在でもある。

そもそもオラン・アスリに対する政策の始まりは、1950年代のイギリス植民地政府の軍事的な戦略に端を発している。マラヤ連邦独立前夜、共産ゲリラがイギリス植民地政府に反乱を起こした「非常事態宣言期（1948年–1960年）」には、イギリス植民地政府は、共産ゲリラに加担していたオラン・アスリを自らの側に引き入れるために、保護的な法制度を確立する。すなわち、1950年に今日のオラン・アスリ局（JHEOA: Jabatan Hal Ehwal Orang Asli）の前身である原住民局を設置し、1954年に今日のオラン・アスリ法の基となる原住民法を制定したのである。こうして、共産主義の脅威から守るという名目によって、オラン・アスリは、近代国家の監視・管理の制度のなかに組み込まれることになる。

1957年に独立したマラヤ連邦政府は、こうしたイギリス植民地政府のオラン・アスリ政策を引き継いだが、マレー系主導の政府はオラン・アスリ政策の意味内容を次第に変えていく。

華人系・インド系の政治経済的優位性に対抗するために1970年代初頭に始まったマレー人優遇のためのブミプトラ政策は、ブミプトラに組み込まれたオラン・アスリにもさまざまな恩恵を与えることになる。オラン・アスリ局を中心として、経済開発、教育、医療などに関する開発プロジェクトが実施されるようになったのである。1980年代になると、マレーシアにおけるイスラーム復興運動がオラン・アスリ政策にも波及するようになる。オラン・アスリに対するイスラーム化政策の開始である（Dentan et al. 1997: 142–150; 信田 1999a; Nicholas 2000: 98–102）。

こうした政策の流れを考えると、オラン・アスリ政策は、マレー系主導の政府が立案したマレー人向けの政策が、いわば歪曲したかたちで実施されたものであると言える。マレーシアの中心で起こっていることの余波が、紆余曲折を経て、周縁世界

であるオラン・アスリ社会のもとに届いているのである。

本稿では、こうしたオラン・アスリ政策の歴史を背景としながらも、政策論的アプローチでオラン・アスリ社会の現況を説明することはしていない。むしろ、オラン・アスリの人びとの生活世界を徹視的に考察することを通じて、政策や外部世界の状況を論じるアプローチの仕方を採用している¹⁾。なぜなら、すでに他の論文などで述べているが、調査地であるオラン・アスリの村には、開発やイスラーム化などの問題群がふんだんに盛り込まれているからである。極論すれば、20世紀末のマレーシアのこの小さな村で住み込み調査を実施した者なら誰であっても、開発やイスラーム化などの問題群にぶつかるにちがいない。

グローバル化した現代世界では、いかなるローカルな場所にあっても、グローバルに拡がる現象を発見することは可能なはずである。本稿での試みのように、遠回りになるかもしれないが、村の小さな事象を考察することによって、開発やイスラーム化などの大きな問題を論じることも十分に可能なことなのである²⁾。ローカルな場から発想する人類学がやらなければならないのは、大局的な見地から見下ろしたローカルな状況の説明ではなく、ローカルな場に立ち会うことで見えてくる現象の解明である。

本稿の後半部で提示する「世帯の記録」は、ドリアン・タワール村の人びとについての情報を詳細に記述したものであり、これまで発表してきた拙稿ではあまり深く触れなかったものである。本稿で「世帯の記録」を提示する意図は、村の人びとの生活実態を可能な限り提示するというにとどまらず、「世帯の記録」の作成を通じて調査者である私が研究テーマを発見していくプロセスの一端を明らかにすることでもある。読者は、「世帯の記録」を読むことによって、私がいかにして研究テーマを発見していったのかを理解するであろう。

調査地であるドリアン・タワール村(図1)は、1970年代以降の開発や市場経済化によって社会経済的に階層化する。1990年代以降は、開発によっていったん構築された階層秩序が、イスラーム化のインパクトを受けて再編させられている。本稿は、こうしたドリアン・タワール村の歴史過程を背景として、現在のドリアン・タワール村の状況を明らかにしようとするものである³⁾。

本稿の目的は、世帯調査や集計調査の結果を手がかりとして、マレーシアの先住民オラン・アスリの村の生活世界の一端を明らかにすることである。個々の世帯状況に関するデータは、1996年から1998年に実施した調査によって得られたものだが、その後の継続調査によって新たに得た情報も加えることにする。私は2006年くらいま

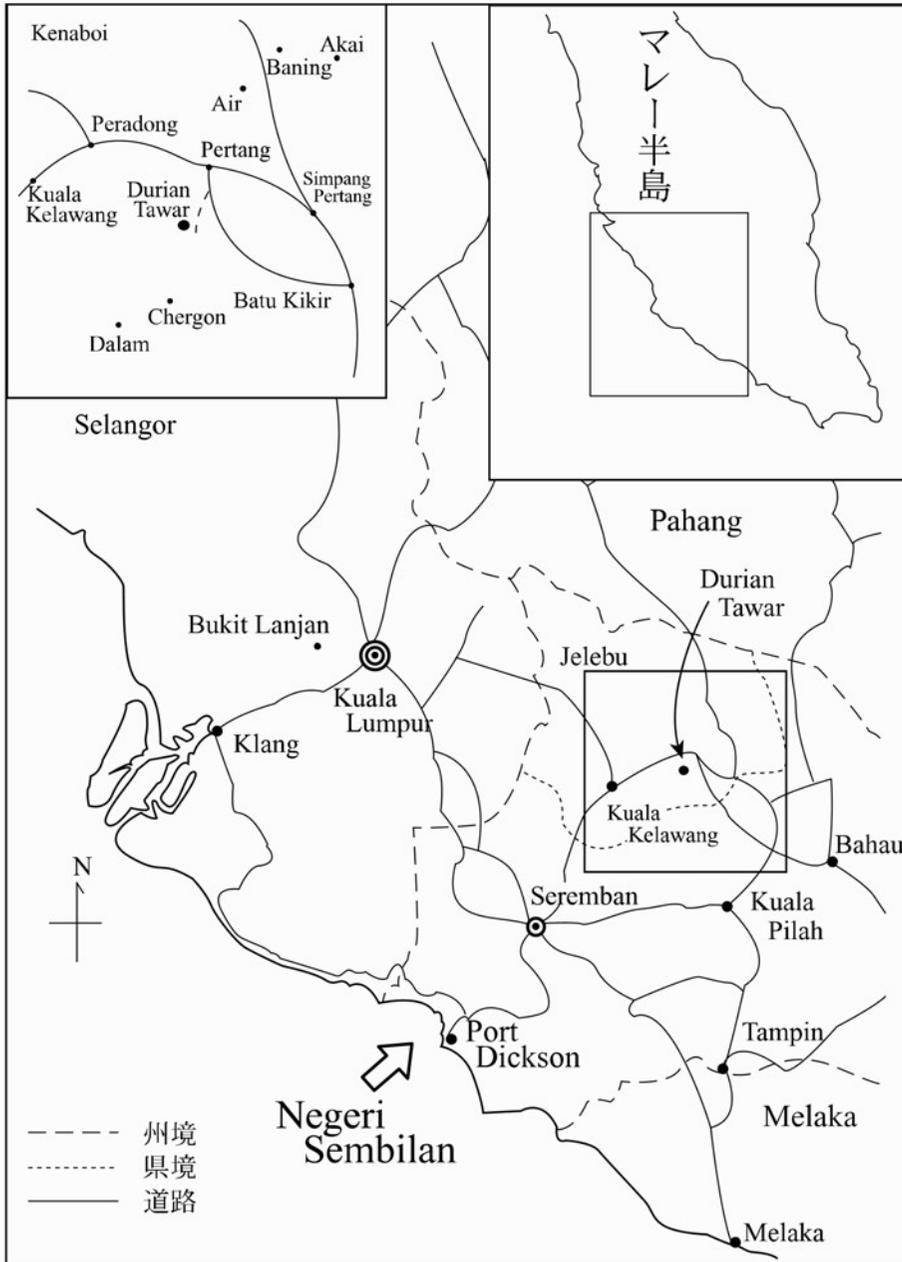


図1 調査地ドリアン・タワール村

で、ドリアン・タワール村で調査を継続したいと考えている。ドリアン・タワール村の10年を見た後、村の社会変化についての総括を行ないたいと考えているので、本稿はそのための基礎資料ともなる⁴⁾。

本稿の前半部では、村の歴史、ゴムやドリアンの収入、世帯調査の結果などの分析を通じて、開発や市場経済化によって形成された村の階層秩序（「上の人びと」と「下の人びと」の生成）について説明する。後半部では、個々の世帯の特徴を記した「世帯の記録」を提示し、「上の人びと」と「下の人びと」という階層秩序には容易に還元されない村の人びとの生活実態を浮かび上がらせる。そして、「世帯の記録」の考察を通じて、オラン・アスリの人びとが抱えている問題群を指摘する。

2 オラン・アスリ

オラン・アスリはマレーシアのマレー半島部の先住民である。人口は約10万人。行政的な慣習から18の下位民族集団に分けられている。オラン・アスリの概説については、拙稿（信田2004）を参照されたい。

オラン・アスリはマレー人とは異なり、多くの人びとはイスラームを信仰せず、アニミズム的な信仰を保持していると考えられている。今日では、マレー人との差異は、イスラーム教徒であるか否かに収斂されつつあるが、政府主導のイスラーム化政策によってイスラームへ改宗する人びとも増えつつあり、マレー人との差異がますます曖昧になりつつある。

経済的な観点からすれば、オラン・アスリの人びとは、マレー半島部における最下層の「国民」である。インドネシアやバングラデシュなどからの出稼ぎ移民とは異なり、彼らはコミュニティを形成している。経済的援助や開発を必要とする「貧しい人びと（*orang miskin*）」というのが、今日の彼らに貼られているレッテルである。実際に、さまざまな理由で、森を基盤とした生活を送ることができなくなったオラン・アスリの人びとは、新たな生活への適応が容易ではなく、その多くが貧困化している。

このようなオラン・アスリをめぐる状況において、スグリ・スンビラン州ジェルブ県に位置する調査地ドリアン・タワール村は、政府主導の開発が積極的に実施されたモデル村として定位されている。政府当局であるオラン・アスリ局との密接な関係、首長パティン・ジャングットの強力なリーダーシップ、そして、市場経済化への迅速な適応など、ドリアン・タワール村はオラン・アスリ社会において経済的にも社会的にも成功を果たした村と考えられている（cf. Baharon 1972; 1973; Jimin 1992）。

拙稿（信田 2000）では、開発の脈絡において高い評価を与えられているドリアン・タワール村が、開発や市場経済化によって結果的には社会経済的に階層化したことを批判的に述べている。そして、「上の人びと」と「下の人びと」としてカテゴリー化されている村の社会経済的構造を、村の歴史や得られた数値的データを基に明らかにした。本稿では、集計調査および世帯調査によって得られた詳細なデータを提示することで、より微視的な分析を試みる。

3 階層秩序の歴史的生成

3.1 親族関係

ドリアン・タワール村の人びとは、何らかの親族関係によって相互に結びついているので、親族関係の用語によって人間関係を語る場合が多い。村の人びとの系譜を作成してみると、すべての人びとは何らかの親族関係によって結びついていることが明らかとなる（図2を参照）。逆に言えば、ドリアン・タワール村には「余所者」は住んでいないのである。

私がドリアン・タワール村で暮らし始めた際に問題となったのは、村びとと私の関係であった。「余所者」である私に対して、どのように呼びかけたらよいのか、どのようなつきあいをしたらよいのか、などが問題になった。例えば、村びとはお互いを「おじさん(wak/mamak)」「おばさん(inak/tuo)」「お兄さん(abang)」「お姉さん(gao)」などの「親族呼称」で呼び合う。あるいは、「A（長子の名が多い）のお父さん(ayah A)」「Aのお母さん(mah A)」といったように、テクノニムを使用する場合もある。また、狩猟で得た獲物の肉の分配など、親族関係に応じて頻繁にモノのやり取りをする。そうしたつきあい方をする村の生活のなかに日本人である私が突然入りこむことは、村びとを困惑させることになるかと憂慮されたのである。

解決策として提案されたのが、私が村の一員になることであった。ある既婚女性の養弟になるという、いささか変則的なかたちではあったが、私はドリアン・タワール村の親族のネットワークに組み込まれることになった。さらに、首長であり「おじさん」であるバティン・ジャングットによって、「ランタウ(Rantau)」という名前を与えられた。その結果、私は「ランタウ兄さん(abang Rantau)」「ランタウおじさん(wak/mamak Rantau)」と村の子供たちに呼ばれるようになった。私もまた、村びとを名前で呼ぶことはなくなり、相手との親族関係に応じて、「おじさん」「おばさん」「お兄さん」「お姉さん」と呼ぶようになった。また、サルや野生ブタなどの肉を分けて

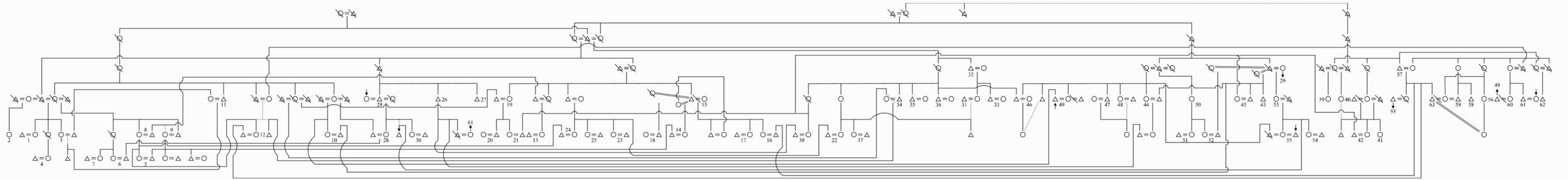


図2 ドリアン・タワー村の系譜図

もらったり、逆に結婚式や葬式に出席した場合などには、適当な額の「援助金 (*derma*)」を支払ったりした。

このようなかたちで村での生活を続けていくと、次第に村の親族ネットワークのなかで自分がどのような位置にいるのかを認識できるようになる。それと同時に、村の親族ネットワークもいくつかの親族のかたまりに分かれていることに気づくようになる。それは、結論的に言えば、女性たちを核とする母系出自集団であり、妻方居住を考慮すれば、女性のキョウダイを核とする親族群である。具体的な親族群については後述するが、その前にドリアン・タワール村の親族関係について概観しよう。

ドリアン・タワール村の社会は、「親族名称は双方的 (*bilateral*) で類別的 (*classificatory*) な傾向を示していて、親族を双方的にたどる傾向が見られる」(Baharon 1973: 373) と指摘され、双系的な構造をもつ社会であるとされている。その一方で、周囲のマレー人の母系的なアダットの影響と考えられるのだが、母系的な原理が導入されている。このように、双系的な社会構造である一方で、母系的な特徴もしばしば見られるというドリアン・タワール村の特異な社会構造は外部世界との関係に大きな要因がある。今日でも、外婚の単位は母系出自集団とされ、同一の母系出自集団の成員の間での結婚は特に厳しく禁止されている。また、妻方居住が理想とされ、夫は「オラン・スムンダ (*orang semenda*)」と言われ、いわゆる婚入者であり、「トゥンパット・スムンダ (*tempat semenda*)」(妻の母系出自集団の意) の事柄に関わることを禁止されている。

妻方居住と母系制は、婚姻による女性の移動を最小限に抑える。その一方で、婚姻を契機とした男性の移動は頻繁である。ただし、「かつての森のなかでの移動生活では、こうした慣行は実施されていなかった」というのが私の推測である。定住化する以前の彼らの社会の構造は、双系的な特徴を持つものであったにちがいないと考えるからである。妻方居住と母系制という母系的なアダットの導入は、彼らが森での移動生活を止めて、あるいは止めさせられて、水田耕作やゴム採液業などの「農業」を中心とした定住生活をするようになったことと関連していると推察できる。

農業を生業の中心とした定住生活は、女性の移動を抑制するばかりでなく、男性の移動の仕方にも影響を与えるようになる。女性が主として所有するゴム園やドリアン果樹園は、当然のことだが、動かすわけにはいかない不動産である。狩猟・採集を生業とする場合ならば、たとえ婚姻によって他の村に移動したとしても、そこに森がある限り、同じ生業を続けることは可能である。華人による日雇い労働の場合も同様である。しかし、ゴム園やドリアン果樹園などの定住農業に従事する場合には、そう単

純ではない。結婚相手の女性のゴム園やドリアン果樹園の規模によって、結婚後の男性の生活は大きく左右されるからである。ドリアン・タワー村のような大規模なゴム園やドリアン果樹園のある村から他村へ移動する場合には、生活水準が落ちるのは明らかである。「婚姻戦略」という考え方に従えば、男性はゴム園やドリアン果樹園を多く所有する女性と結婚する方がいい。女性側の婚姻戦略は、ゴム園やドリアン果樹園で一生懸命働いてくれる男性を探すことである。

妻方居住と母系制のこのような規範のなかには例外的な実践も存在する。それが称号を保有するリーダーの男性たちが行なっている実践である。称号保有者は、称号を継承した場合、他村から妻子を連れて出身村に戻る。称号保有者は妻方居住の規範に従う必要はないと考えられているからである。称号保有者には、それ相当の土地が与えられる。その土地は称号保有者の娘たちに相続されていく。

ドリアン・タワー村のように妻方居住を伴う母系社会の場合、キョウダイ、特に女性のキョウダイの結束は強く見える。それは、女性がゴム園やドリアン果樹園などの土地を所有していることに原因がある。そうした女性たちによって、親族のリーダーである称号保有者は選ばれている。リーダーは女性たちが選ぶということが、この村の特徴である。

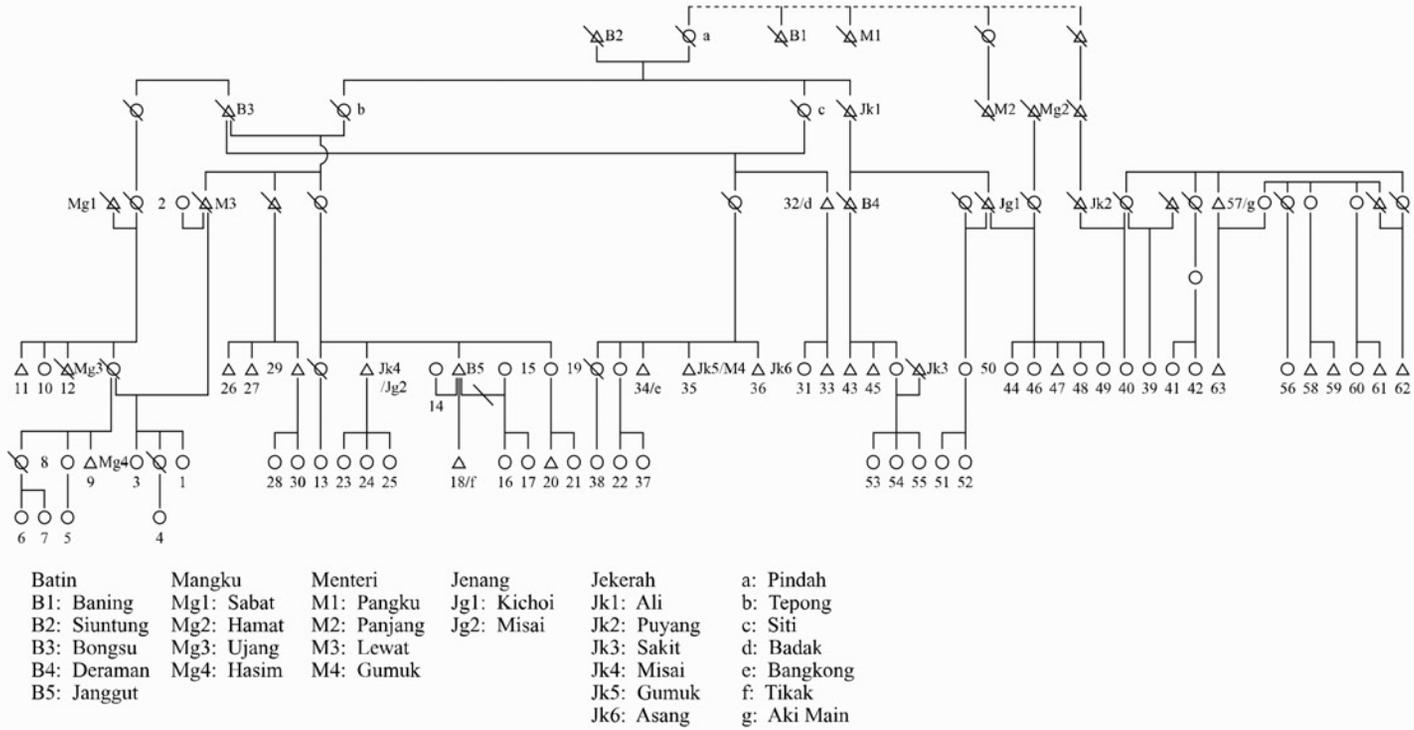
ドリアン・タワー村の親族ネットワークを見渡してみると、キョウダイ関係、特に女性のキョウダイ関係を核とする親族群が認められる。そのほかに、称号保有者の子孫の親族群や、開発などの影響で親族を頼って移住してきた人びとの親族群が認められる。

次節では、ドリアン・タワー村の歴史を簡単に振り返りながら、親族群の形成過程を跡付けてみる。村の歴史の詳細については、拙稿（信田 2000: 132-142）も参照されたい。

3.2 ドリアン・タワー村の歴史

ドリアン・タワー村の人びとの祖先バティン・バニンと彼の親族たちが、タンピン方面からドリアン・タワー村の南部に移住してきたのは、1870年代頃のことであった。彼らの落ち着き先は、現在ではドゥスン・イラムと呼ばれる場所であった。この場所で祖先たちは、陸稲・タピオカ・トウモロコシなどの焼畑耕作に従事し、ドリアンの苗木を植えたと言われている。

バティン・バニンとその妻はウル・ブランにドリアン収穫に出かけて、マレー虎に遭遇して殺されてしまったので、バティン・バニンの母方イトコであったピンダー



注1) Batin は最高位のアダット・リーダー、Mangku は Batin 不在時の代理、Menteri は Batin の補佐、Jenang はアダットの執行・保護、Jekerah は村人全体の保護といった役割をそれぞれ担うとされている。
 注2) 番号は世帯番号。村では妻方居住を原則としているが、例外もある。系譜図では基本的に婚入者（夫あるいは妻）を省略して、世帯間の親族関係を示すことにした。

図3 称号継承系譜図

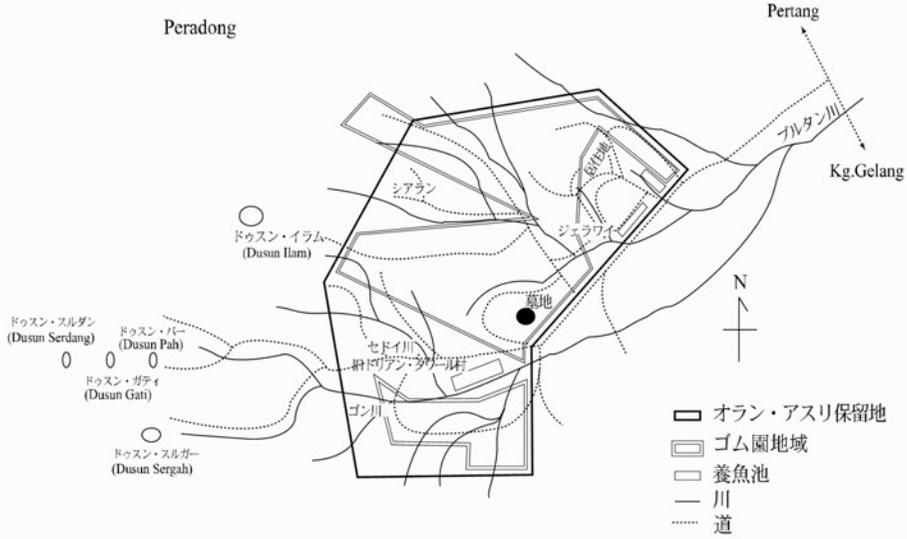


図4 ドリアン・タワー村の地図



図5 ドリアン・タワー村の居住地

の夫バティン・シウトゥンがバティンの称号を引き継いだ。

1880年代頃、人びとはバティン・シウトゥンに率いられ、ドゥスン・イラム付近から現在の居住地付近にまで移住した。バティンは「マレー人」であったので、彼の親族の住むマレー村の近くにまで移住してきたのである。そこで、水田耕作を始めた。ドリアン収穫期には、マレー人親族を招いて共食した。

1920年代頃、バティン・シウトゥンの娘の夫であるボンスがバティンの称号を継承した。バティン・シウトゥンの息子アリはジェクラの称号を名乗った。ボンスもまた、「マレー人」の血を引いていたと言われている。

バティン・ボンスは、アカイ村のバティン・ドゥランやダラム村付近にあったチェルゴンのバティン・ケセット（ボンスの実兄）と交流があった。彼らに率いられた人びとの間には通婚関係が持たれるようになった。一方、ジェクラ・アリに率いられた人びとは、バティン・ボンス派と分かれて、現在のシアラン付近に移住した。このようにして、ドリアン・タワール村は実質的に二つに分裂した。

1940年にバティン・ボンスが亡くなり、ジェクラ・アリの息子ドゥラマンがバティンの称号を継承すると、バティン・ボンスの息子レワットはムントウリの称号を継承して、旧バティン・ボンス派のリーダーとなった。こうして、ジェクラ・アリ派とムントウリ・レワット派が形成された。以下では、アリ派とレワット派と表記する。この分裂は、その後の村の歴史では重要な意味を持つ。

日本軍占領期には、バティン・ボンスの娘の夫で華人のパンリマ・センが日本軍に捕まって殺された。彼をかくまっただとして日本軍の逆鱗に触れたと判断したアリ派やレワット派の人びとは、森の奥へと避難した。現在のドゥスン・パーやドゥスン・ガティにおいて、ダラム村やチェルゴンの人びとと合流した。

日本軍が降伏すると、人びとは森から出て、アリ派はシアランに戻り、レワット派は旧ドリアン・タワール村付近に住むようになった。当時、すでにダラム村やチェルゴンの人びととの間に通婚関係が持たれていた。

非常事態宣言期には、ジェルブ県のオラン・アスリの人びとは、プラドンの再居住地で避難生活を強いられた。そこで、ドリアン・タワール村の人びとは、さらに他地域のオラン・アスリの人びととの間に通婚関係を持つようになった。

1956年くらいまでに、ほとんどの人びとは出身村に戻ることが許されたが、結婚した人びとのなかにはそれぞれ妻や夫の出身村に行くことになった人びともいた。アリ派の人びとはシアランに、レワット派の人びとは旧ドリアン・タワール村付近にそれぞれ戻った。その後、アリ派の一部は、現在のジェラワイに移住した。

1967年に、華人パンリマ・センの息子がバティンの称号を継承した。バティン・ジャングットである。ムントゥリ・レワットと共に、レワット派のリーダーとなったバティン・ジャングットは、アリ派に集中していた称号を自らの親族の側に継承させていった。それと同時に、オラン・アスリ局職員でもあった彼は、オラン・アスリ局が進める開発プロジェクトを積極的に村に導入して、レワット派の人びとのリーダーとなっていった。その後、ブキット・ランジャン村から移住してきたアキ・マイン派の人びとやバティン・ドゥラマンによって追放されたジェクラー・ボヤンの妻子などがドリアン・タワー村に移住してきた。

1970年代以降、ドリアン・タワー村には積極的に開発プロジェクトが実施されるのだが、その嚆矢となったのは、1970年に実施が開始された家屋建設プロジェクトであった。この開発プロジェクトにより、旧ドリアン・タワー村に住んでいたレワット派の人びとと、シアランに住んでいた一部の人びと（ジェクラー・ボヤンの妻子）が、現在のドリアン・タワー村の居住地地域に移住した。その後、彼らはゴムの開発プロジェクトなどを積極的に受容していった。家屋建設プロジェクトは丘の上で実施され、彼らの家屋は丘の上に立ち並んでいることから、彼らは「上の人びと」と呼ばれるようになった。

一方、アリ派の人びとは、シアランからジェラワイに移住してきたが、家屋建設プロジェクトには参加せず、その後の開発プロジェクトにも消極的であった。アリは、「ゴムは食べられない」として、ゴムの開発プロジェクトを拒否した。「上の人びと」に対し、彼らは丘の下に住んでいるので、「下の人びと」と呼ばれるようになった。

開発プロジェクトが実施されるにつれて、両者の経済格差は拡大していった。そして、「上の人びと」と「下の人びと」という空間領域に基づいたカテゴリーは、社会経済的な階層を含意するようになっていった。

3.3 ドリアン・タワー村の階層秩序

今日のドリアン・タワー村では、村びとは「上の人びと」(No. 1 から No. 39) と「下の人びと」(No. 40 から No. 63) に範疇化されている。親族関係の脈絡では、「上の人びと」の中核はレワット派の人びとの子孫であり、具体的にはピンダーを祖とする母系出自集団とムントゥリ・レワットの姻族集団である。一方、「下の人びと」はアリ派の人びとの子孫と新移住者アキ・マイン派の人びとである。

「上の人びと」と「下の人びと」の範疇化には、ドリアン・タワー村に導入された開発プロジェクトが大きな影響を与えている。とりわけ、かつてのレワット派とア

リ派の子孫たちの関係には、開発プロジェクトが重大な影響を与えている。ここでは、生業の変化と称号継承ポリティクスの観点から、レワット派とアリ派の階層化の過程を検証してみる。

かつて焼畑農業、森林産物の採集、そして狩猟が生業の中心であった時代、つまり、森のなかを移動していた時代には、森のなかでの生存技術に長けたアリ派の人びとが主導権を握っていたと考えられる。今日でもアリ派の人びとは狩猟・採集活動を盛んに行なっている。ジェクラール・アリは、狩猟・採集活動を行なう上でのリーダーであった。

忘れてならないのは、女性たちが中心になって水田耕作に従事していたことである。アリ派であれ、レワット派であれ、女性たちは水田耕作を少なくとも1970年代中頃までは行なっていたのである。ここで確認しておきたいのは、米は換金作物用ではなく、あくまで自給用として栽培されていたということである。

一方、ムントゥリ・レワットは、非常事態宣言期後には村でゴム栽培を始めたと言われているように、狩猟・採集よりもゴム採液業に関心を持っていたし、ドリアン栽培にも積極的であったと言われている。狩猟・採集を好むアリ派の人びとと、ゴムやドリアンを重視するレワット派の人びとの両者の指向性の違いが、その後の両者の関係を決定づけていった。

バティン・ジャングットの時代になり、ゴムなどの開発プロジェクトが導入されると、ゴム栽培という換金作物栽培がドリアン・タワール村で本格化した。そして、森林伐採などの要素も加わり、森林資源の枯渇化も生じた。開発の論理では、その日暮らしの狩猟・採集を中心とした生業の価値は低く見られがちである。逆に、ゴム採液業などの市場経済化に適応しうる生業は評価されるようになった。

アリ派の子孫たちは、家屋建設プロジェクトにも参加することなく、その後の開発プロジェクトにも参加しなかった。彼らが参加したいと考えるころには、開発プロジェクトから排除されるようになった。彼らは社会経済的に下層に位置するようになり、「下の人びと」となった。

一方、レワット派の子孫たちは、新しいリーダーであるバティン・ジャングットに従い、家屋建設プロジェクトやその後の開発プロジェクトに積極的に参加して、経済力を身につけるようになった。こうして、彼らは社会経済的に上層に位置するようになり、「上の人びと」となった。

政治的にも、開発プロジェクトが導入されて、レワット派が経済的に優位になるにつれて、レワット派がアリ派を駆逐していった。一時は、ムントゥリ・レワット以外

の称号は、すべてアリ派の人びとが保有していたが、バティン・ジャングットがバティンの称号を継承して、開発プロジェクトを積極的に導入するようになると、レワット派に称号が集中するようになったのである。

こうしてレワット派の子孫（今日ではバティン・ジャングットを中心とする人びと）は、アリ派の子孫を政治的にも経済的にも圧倒することになった。「上の人びと」と「下の人びと」とは、レワット派とアリ派という確執を伝えられる人びとの、歴史過程における選択の結果を象徴するものである。図式的に言えば、レワット派はゴム栽培を導入し開発を受容した結果、「上の人びと」になり、アリ派は狩猟・採集活動に固執し開発を拒否した結果、「下の人びと」になったのである。

以上、ドリアン・タワール村における階層秩序の概要を述べてきた。以下では、世帯調査結果やゴム採液やドリアン収穫の集計結果に基づいて、「上の人びと」と「下の人びと」の経済格差を明らかにし、その後で、個々の世帯に関する情報を「世帯の記録」として提示する。

4 「上の人びと」と「下の人びと」の経済格差

4.1 世帯調査

4.1.1 調査の方法

1996年から1998年にかけての長期調査の期間、村びとの経済状況および家族・親族関係を中心とした社会関係を把握するために、世帯調査やゴムやドリアンによる収入の集計調査を実施した。このような村全体のデータを網羅的に把握するための調査でも、把握できない部分が残るのは否めない。その理由として、私の調査の精度が低いという理由だけでなく、調査者である私もドリアン・タワール村の社会関係に埋め込まれていたという理由が考えられる。私は村のマジョリティの側に立って調査を進めていたが、そのことが逆に、対立する村のマイノリティの側の一部の人びとから調査の理解を得られない結果をもたらしたのである。

とはいえ、私はできる限りの範囲で調査を実施した。狩猟・採集や日雇い労働（雇い主は華人）に従事する「下の人びと」の生活の実態や収入について、網羅的に把握できなかったのは残念なことである。ただし、彼らの生活実態や収入については、世帯調査結果から多少なりとも推察することができる。

世帯調査によって明らかになったことの一つは、モノの所有からうかがえる村びと

の経済状況である。一軒ごとに訪問したことも、村びとの生活実態の把握につながったと考えている。上述したように、さまざまな事情から正確な所得を把握できないので、彼らがどのようなモノを所有しているかということを、調査の出発点にしたのである。こうして得られたデータは、ゴムとドリアンの集計調査で得たデータと連動していることが明らかになった。つまり、これらの調査で得られたデータは、お互いにお互いを裏付けるデータとなっているのである。

調査対象は主として世帯を単位とした。世帯内の個々人——特に世帯主——の特徴については、調査期間全体を通して得られた情報を「世帯の記録」として提示している。

世帯調査での主たる調査項目は、世帯構成から親族関係（名前や年齢を含む）、一カ月あたりの所得、学歴、村内での役職、所有耕作地面積、結婚（夫や妻の出身村から結婚形態にいたるまで）、宗教、呪術的知識、家屋や台所の形態、家禽、電気・水道・電話・テレビ・ラジオ・洗濯機・冷蔵庫・自動車・バイクなどの有無などである。

調査助手として、村の事情に詳しいアサット（Asat）氏に手伝ってもらうことにした。村の一員となった私の「イトコ」にあたる男性である。一日一軒の割合で、日が暮れて涼しくなってから、アサット氏と共に調査を実施した。調査の段階では、人びとが虚偽を述べているかどうかをアサット氏にそれとなく確かめながら記録していった。しかし、たとえば耕作地面積などのデータが正確かどうかということは、答えている彼ら自身にも分からないことであった。したがって、本稿で提示する数値的データはあくまで目安である。

行政当局であるオラン・アスリ局が実施した世帯調査の書類（各世帯の名前・年齢が書かれているのみであり、しかも必ずしも世帯全員の名前・年齢ではない）にも目を通したが、その内容は私が実施した世帯調査と比較してみるとかなり杜撰であり、資料として本稿で提示する意味はないと判断している。その代わりに、保健所（Pusat Kesehatan）の世帯に関するデータが役に立った。オラン・アスリに関するオラン・アスリ局の公的な文書資料の大半は、程度の差はあるものの、このような状況にある。さらに厄介なことに、オラン・アスリ局は自らの部局が批判的となるような資料を公開しない傾向が強い。また、オラン・アスリのことはオラン・アスリ局に任せられているので、他の部局にはオラン・アスリに関する資料がほとんど存在しない。

オラン・アスリは、税金の支払いを免除されている人びとである（前田 1969: 354）。その代わりに土地の登記もほとんど行なわれていない。彼らが所有していると考えている土地の大半は、「オラン・アスリ保留地」となっているか、「森林保留地」（つ

まり、彼らには土地権がない)となっている。特に、「森林保留地」は政府の土地であるため、本稿で述べるような森のなかのドリアン栽培は正確に言えば違法である。税金を支払う必要があるほどの収入があるバティン・ジャングットなどの「高額所得者」たちは、彼らの所得を明らかにしない傾向がある。土地の所有なども明確な数字としては出てこない。つまり、オラン・アスリの経済状況を示すような公文書はほとんどないというのが現状である。

世帯調査を実施することで、少なくともモノの所有という観点から「上の人びと」と「下の人びと」の経済格差を明らかにすることができる。上述したように、さまざまな事情から正確な所得が不明なので、彼らがどのようなモノを所有しているかということを出発点にしたのである。ここでは、それぞれのモノの特徴や世帯状況を記述しながら、「上の人びと」と「下の人びと」に分類して、両者の世帯状況を比較してみる(表1および表2を参照)。

4.1.2 世帯調査結果

(1) 家屋

家屋形態については、「上の人びと」(No. 1 から No. 39)のほとんどが、1970年代初頭の家屋建設プロジェクトによって建てられた政府提供の画一的な家屋形態である。しかし、政府提供の家屋(居間1部屋、寝室1部屋、台所1部屋)のままである世帯は少なく、ほとんどが台所を部屋に変えたり、寝室を増やしたりするなどの改築や増築を行なっている。それは、寝室数によって明らかである。政府提供の家屋の状態であれば、寝室数は1となるが、ほとんどの世帯はそれ以上の寝室数を答えている。世帯人数が多い場合には、居間も夜間は寝室になっていることを留意されたい。

「下の人びと」(No. 40 から No. 63)の場合には、私設の家屋以外の政府提供の家屋は、PPRT(Program Pembangunan Rakyat Termiskin: 最貧民開発計画)という最貧民層対象のプログラムによる家屋が多いことに気づく。その場合の寝室数の回答は2部屋と答えている世帯が多かったが、これは、夜間には寝室に変わる居間を寝室と見なした結果である。この最貧民層対象の家屋と「上の人びと」が住む政府提供の家屋の違いは、最貧民層対象の家屋は地面にセメントを張り、セメント・ブロックを土台として積み上げてつくる「物置」とも言える簡素な家屋であるのに対して、「上の人びと」の政府提供の家屋は高床式のバルコニーの付いた木造の家屋であるという点である。それは、今日では木材よりもセメントの方が安価であることに原因がある。つまり、材料のコストの問題が関係しているのである。事実、最近では、「上の人びと」や「下

の人びと」に関係なく、ほとんどの私設の家はセメント中心の家屋が主流を占めている。

村全体で PPRT のプログラムで建設された家屋の建設率は、63 戸のうちの 13 戸で約 20.6% である。寝室数の平均は約 2.43 であり、世帯人数の平均は約 6.16 人である。次にこれを「上の人びと」と「下の人びと」で比較してみよう。

PPRT のプログラムで建設された家屋の割合を比較すると、「上の人びと」は 39 戸のうちの 2 戸（約 5.1%）であるのに対して、「下の人びと」は 24 戸のうちの 11 戸（約 45.8%）である。寝室数の平均は、「上の人びと」が約 2.74 であるのに対して、「下の人びと」は約 1.96 である。世帯人数の平均が「上の人びと」が約 6.13 人であるのに対して、「下の人びと」は約 6.21 人とやや「上の人びと」を上回っている。このことから、「上の人びと」でさえ、家屋・寝室数が不足しているのに対して、「下の人びと」の家屋・寝室数はさらに不足していることが分かる。

(2) 台所

台所の形態については、ガス・コンロを所有している世帯（そのほとんどはかまども所有）とかまどだけを所有している世帯に分類される。炭・落木などを燃料にするかまどは、特に肉料理のような弱い火力を必要とする時に使用される。したがって、ガス・コンロを所有していたとしても、肉を焼いたり、煮込み料理をしたりする時などには、かまどを使用するので、ガス・コンロを購入してもかまどは残しているのである。かまどだけの世帯のほとんどは、嗜好的にかまどを常に使用する世帯を除いて、ガス・コンロやプロパン・ガスなどのガス台所にかかる費用の支出が厳しい世帯だと見なすことができる。それは電気や水道についてもあてはまる。電気代・水道代を支払えずに、電気や水道が止められた世帯もある。

今日では笑い話になっているが、かつてガス・コンロが村に導入され始めたころ、「ガス自体は毒なのに（それを吸えば死んでしまう）、その火で肉を焼いたり、料理をしたりするということは惣菜もまた毒されることになるのではないか」とガスを使う料理をためらった村びと（特に老年の人びと）がいた。電話についても同様の笑い話がある。電話機に電気が流れていると思っていた人びとは、電話機をとると感電してしまうから怖くて電話機を扱えなかったというのである。

ガス台所の所有率は、村全体としては約 57.1% である。そして、「上の人びと」のガス台所所有率は約 69.2% であるのに対して、「下の人びと」のそれは約 37.5% である。

表1 世帯調査結果

世帯 番号	男女別世帯 人数		世帯 人数	家屋の形態			台所	電気	水 (水道/井戸)	電話	テレビ	ビデオ	ラジオ	洗濯機	冷蔵庫	車	バイク	自転車
	男性	女性		私設/政府	寝室数	備考												
1	3	3	6	私設	2		ガス/かまど	発電器	水道		○						1	1
2	0	2	2	私設	1		かまど		水道									
3	1	3	4	政府	3		かまど	○	水道	○	○		○				2	
4	1	2	3	私設	1		かまど										1	
5	3	3	6	政府	4		かまど	○	水道	○	○		○				2	
6	1	2	3	私設	2		かまど		水道								1	
7	2	3	5	政府	1		ガス/かまど	○	水道		○		○				1	
8	4	2	6	政府	2		ガス/かまど	○	水道	○	○						1	
9	3	6	9	私設	5		ガス/かまど	○	水道	○	○	○	○	○	○	1	4	
10	5	6	11	政府	4	PPRT (1996)	ガス/かまど	○	水道	○	○						2	
11	5	3	8	私設/政府	4		かまど	○	水道		○		○				1	1
12	2	4	6	政府	3		ガス/かまど	○	水道	○	○	○	○			1	2	
13	6	3	9	政府	3		ガス/かまど	○	水道	○	○		○	○			3	
14	11	11	22	私設	9		ガス/かまど	○	水道	○	○	○	○		○2	2	4	
15	0	2	2	私設	4		ガス/かまど	○	水道	○	○		○		○		1	
16	2	5	7	私設	4		ガス/かまど	○	水道	○	○		○		○		2	
17	2	1	3	政府	2		ガス/かまど	○	水道	○	○		○		○		1	
18	2	5	7	政府	5		ガス/かまど	○	水道		○2	○	○2		○	1	4	1
19	2	4	6	私設	6		ガス/かまど	○	水道	○	○		○	○			5	1
20	2	4	6	政府	3		ガス/かまど	○	水道	○	○		○		○	1	1	
21	2	4	6	私設	2		ガス/かまど	○	水道	○	○		○		○		2	
22	5	1	6	私設	2		ガス/かまど	○	水道	○	○		○	○			1	
23	2	2	4	私設	2		ガス/かまど	○	水道	○	○	○	○		○	1	1	
24	4	3	7	政府	4		ガス/かまど/電気	○	水道	○	○		○	○	○		4	
25	3	4	7	政府	2		ガス/かまど	○	水道	○	○		○				2	
26	2	1	3	政府	1		ガス/かまど	○	水道	○			○					1
27	1	0	1	私設	1		かまど											1
28	6	6	12	政府	6		ガス/かまど	○	水道	○	○		○		○		2	
29	2	1	3	政府	1		かまど	○	水道				○				1	1

30	1	4	5	政府 (PPRT)	1	PPRT (1996)	ガス/かまど		水道	○	○		○			1	
31	3	1	4	政府	1		ガス/かまど	○	水道		○		○			1	
32	1	1	2	私設	1		かまど	○	水道				○				
33	4	4	8	政府	2		かまど	○	水道		○					1	
34	3	5	8	政府	3		ガス/かまど	○	水道	○	○		○			1	
35	7	4	11	政府	3		かまど	○	水道	○	○		○		1	3	
36	6	1	7	私設	2		かまど	○	水道	○			○			1	
37	3	2	5	政府	1		ガス/かまど	○	水道	○	○		○			1	2
38	4	3	7	政府	2		ガス/かまど	○	水道	○	○		○			2	
39	0	2	2	政府	2		ガス/かまど	○	水道	○			○			1	
40	2	1	3	私設	2		ガス/かまど	○	井戸		○		○			1	1
41	3	3	6	私設	3		ガス/かまど	○	井戸		○		○			2	
42	4	3	7	私設	2		ガス/かまど	○	井戸							1	1
43	1	0	1	私設	1		かまど		水道								
44	3	4	7	政府 (PPRT)	1	PPRT (1992)	かまど		井戸				○			2	
45	5	6	11	私設	3		かまど	○	水道		○	○	○			3	
46	4	5	9	私設	2		かまど	○	水道	○						2	
47	4	3	7	私設	2		ガス/かまど	○	水道		○		○			1	
48	1	2	3	私設	2		ガス/かまど	○	水道		○		○	○	1	1	
49	5	4	9	政府 (PPRT)	1		かまど		井戸				○				3
50	2	2	4	私設	1	畑地の「小屋」	かまど		井戸				○			1	
51	4	4	8	政府 (PPRT)	1		かまど		井戸								
52	3	1	4	政府 (PPRT)	1		かまど		井戸								
53	2	5	7	政府 (PPRT)	1	PPRT (1994)	かまど		井戸								
54	5	1	6	政府 (PPRT)	1	PPRT (1995)	かまど		井戸		○	○					
55	3	2	5	私設	2		かまど		井戸			○					2
56	5	1	6	政府 (PPRT)	1	PPRT (1996)	かまど		井戸				○				3
57	3	3	6	私設	5		ガス/かまど	○	水道	○	○		○			2	
58	3	4	7	私設	3		かまど	○	井戸	○	○	○				1	
59	2	2	4	政府 (PPRT)	1		ガス/かまど	○	井戸		○	○	○			1	
60	6	6	12	私設/政府	5	PPRT (1996)	かまど		井戸							2	
61	5	1	6	政府 (PPRT)	1		かまど		井戸				○			2	2
62	5	1	6	私設	4		ガス/かまど	○	井戸		○		○				3
63	1	4	5	政府 (PPRT)	1		ガス/かまど	○	井戸		○		○			1	1